

英語教師の大学での経験： アンケート調査からわかる学生時代の過ごし方

University experiences of pre-service teachers:
Through an analysis of a questionnaire survey

大 場 博 幸¹, 渡 辺 敦 子², 秋 山 朝 康³

Hiroyuki Ohba,

Atsuko Watanabe,

Tomoyasu Akiyama

Abstract

The purpose of this study is to examine factors which affect pre-service teachers of English at Department of English at Bunkyo University to become a teacher of English. In February 2018, a questionnaire was distributed to 509 graduates from the academic years between 2011 and 2014. The questionnaire asked questions about their curricular and extra-curricular experiences at the university such as their perceived grades, being a member of clubs, and having a part-time job. 116 questionnaires were returned. The results of logistic regression analysis implied the importance of having an image of an ideal teachers as the crucial factor to be a teacher. There were no significant relationships observed among other factors.

目次

1. はじめに
2. 調査概要
3. 調査結果
 - 3.1. 記述統計
 - 3.2. 教職就職に影響する要因
4. 考察
5. 結論
- 参考文献
- 付録

1. はじめに

英語教師への就職の可否を決めるのは、大学

時代のどのような経験なのだろうか。あるいは、そもそも英語教師となるうえで影響する経験というものが存在するのだろうか。本研究ではこれらの疑問について、量的データを用いて検討したい。

中学校や高校の英語教師となるには、まず教員採用試験を通ることが必要である。加えて、教員免許を取得するために大学時代に必要な単位を取ることが必要となる。これらの関門を通過するには、優れた学力とコミュニケーション・スキルを示すことが求められる。

ならば、そのような学力やスキルはどのように獲得すればいいのだろうか。成績を向上させるためにガリ勉をするというのが一つの対応として考えられる。だが、大学において教職志望

¹ 日本大学文理学部

² 文教大学文学部

³ 文教大学文学部

の学生を指導してきた著者三人の経験をかえりみると、大学時代の成績だけが英語教師への就職を説明できる唯一の要因であるという印象はない。他にも、教職を志望する学生の考え方や態度などが影響しているという可能性がある。もちろん、一定レベル以上の成績が重要であることは疑いない。けれども、その他の何かも教師となるための要因となるのではないか。

教科に対する知識や教えるためのスキル以外の、教員にとってこれらの他に必要なことはすでに「教師の資質」論として議論がなされてきている。英語教師に限って言えば、奈良(2006)、高橋(2011)、柳瀬ほか(2011)らの先行する議論がある。ただし、これらはすでに英語教師の職に就いた者に向けられており、「すでに英語教師である人物にはこれこれの資質が必要だ」という議論となっていることが多い。だが、英語教師を目指す学生を指導する大学教員としては、学生が職に就く前の段階における指針が欲しいところである。しかしながら、これら先行する議論は、そうした段階においては、学生の置かれた境遇が違いすぎるために、過剰に詳細であったり具体的でなかったりする。そもそも教師となる以前に先行して存在する、教師に必要な考え方や態度というものはあるのだろうか。またそれらがあるとして、その具体的な内容は何だろうか。この疑問にアプローチするために、本研究では教員経験者の学生時代の経験を検証することとする。

筆者らの研究プロジェクトは、全体として質的研究と量的研究の二つのアプローチ法を用いている。前者の質的研究として、教職に就いた者および教職を希望しながら諦めた者に対して、学生時代の過ごし方についてインタビュー調査を行っている。この調査の結果については、本稿とは別に公表する予定である。本稿は、後者の量的研究に取り組む。

本稿では、教職に就いた者、教職を希望しながら諦めた者、さらには教職をそもそも志望しなかった者の学生生活を把握することで、学力

やコミュニケーション・スキル以外の面での教職志望者の資質について検討することを試みる。ただし、「資質」が何であるのかわからない段階で量的調査の質問項目を立てることは難しい。ここでは、大学時代の客観的な経験から推論するという方法を採用することによって、仮説を得ることをまずは目的としたい。分析のためのデータは、文教大学文学部・英米語英米文学の卒業生(以下「英文科生」と略記)から得た。以下、2章で調査の概要と項目について説明し、3章で集計結果とかつロジスティック回帰分析の結果を示した。ロジスティック回帰分析を用いたのは、調査項目間における重要性を比較したいがためである。4章でその分析結果について考察を加える。最後に5章で結論を示す。

2. 調査概要

この章では、アンケート調査と、サンプルとした文教大学文学部の英文科生の特徴について説明する。

文教大学は南関東に複数のキャンパスを持つ四年制私立大学である。教育学部が看板学部であり、教員養成の実績で全国に知られている。このため教育学部のある埼玉県の越谷キャンパスには教職志望の学生が多く集まっている。文学部は同じ越谷キャンパス内に設置されており、やはり教員養成に適した学科構成やカリキュラムが特色となっている。

文学部は英文科のほか、日本語日文学科、中国語中国文学科、外国語学科の四つの学科で構成されている。一方で、他大学の「文学部」内に置かれている哲学科や史学科のような、専門探求的な学科がない。カリキュラムの詳細は省くが、他学部と比べれば教養的であるとはいえ、他大学の文学部と比べれば語学の習得を目的としたスキル重視の傾向が強いと言えるだろう。

英文科においても中学校および高校の英語教員免許の取得を目的とした学生が多く在籍して

いる。ここ数年の学内でのアンケート(非公表)からは、入学時点での英文科生の7割～8割程度が教職に就くことを志望していることがわかっている。

調査対象としたのは、2011～14年度に英文科を卒業し、かつ現在の住所のわかる509人に対してである。調査時点で彼らのほとんどはまだ20代で、数年ながらもすでに職業人としてのキャリアを積みつつ、まだ大学時代の経験がキャリアに影響していると想定できる。また、大学時代の記憶もまだ色あせていないだろう。もっと年配になると、卒業後の経験のほうが重要となるかもしれない、また卒業後、日が浅ければまだキャリア形成のスタートラインに立っていない可能性がある。これらの点で、大学での経験を尋ねるのに適切なアンケート対象であると言える。

彼ら卒業生に対して往復はがきにてアンケートを実施した。調査期間は2019年の2月14日～4月2日の間で、卒業からおおよそ5年～8年を経て振り返った学生時代の状況および現況について回答したということになる。回答の記入は、葉書だけでなく、インターネットを通じた方法も選択できるようにした。有効回答数は116件で、有効回答率はおよそ23%となった。

アンケートでは以下のことについて尋ねた。葉書の文面については付録に示した。

- ①大学入学時に教職を志望していたか否か
- ②在学時に教職を志望する友人がいたか否か
- ③在学時に理想の教師像を抱いていたか否か
- ④学習塾または家庭教師経験の有無
- ⑤在学時に授業以外で熱心に取り組んだ活動は、アルバイト、サークル、ボランティア、その他、のいずれか(複数回答可)。
- ⑥在学時の英語関連科目の成績(「かなり良い、良い、まあまあ、悪い」の四段階)
- ⑦在学時のすべての科目の成績(「かなり良い、良い、まあまあ、悪い」の四段階)
- ⑧卒業後における教職経験の有無(非常勤講師を含む)
- ⑨教職をあきらめたのはいつの時点か(①で「はい」と答えた場合のみ)

それぞれの項目の調査意図については、次章において結果と併せながら解説する。

3. 調査結果

3.1. 記述統計

3.1.1. 大学入学時に教職を志望していたか否か

文教大学に入学した時点で、教職に就くことを志望しているかどうかを尋ねた。入学時点での動機が教職獲得に影響するかどうかを検討するためである。予想をすれば、入学時にすでに

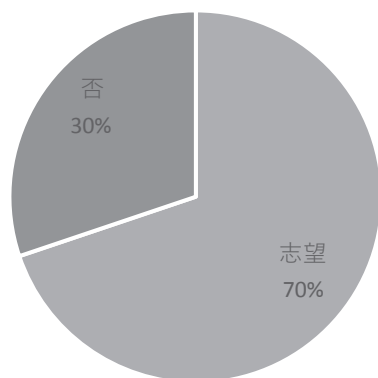


図1 大学入学時の教職志望の有無

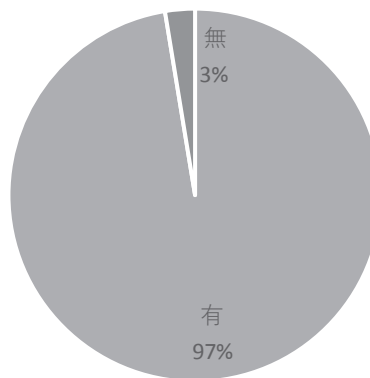


図2 在学時教職志望友人の有無

教職という目標がはっきりしている学生は、そうでない学生より有利であると考えられる。なお、質問においては、大学や私塾の教師を除くことを明記していない。だが、文教大学に在籍した英文科ならば、「教職」が小学校または中学・高校の教師であることを認識していることを期待できる。

調査結果を図1に示した。実数では、はいと答えた者が81人、いいえと答えた者が35人である。入学時点の教職志望者は7割を占め、結果は学内で学生管理用に行った非公表の調査と傾向がおおむね一致する。

3.1.2. 在学時に教職を志望する友人がいたか否か

大学在学時に教職を志す友人がいたかどうかを尋ねた。そのような友人の存在は、教員となることに直接影響するわけではない。しかし、そのような友人の存在は、お互い切磋琢磨しあうことで、周囲の学生の教職志望への熱意を刺激し、教職に就くための努力を促すと予想される。また、大学における教職免許関連科目の単位取得や教員採用試験についての情報共有といった、情報面でのメリットも考えられる。こうしたプラス面の影響が想定できる一方で、成績の優れた教職志望の友人の存在は、それより劣る学生に能力差を認識させることで、あきらめの感情に追い込んでしまう可能性もある。いったいそれはどのように機能するのだろうか。

調査結果を図2に示した。実数では、はいと答えた者が113人、いいえと答えた者が3人である。ほぼすべての回答者に学生時代、教職志望の友人がいたことがわかった。

3.1.3. 在学時に理想の教師像を抱いていたか

大学在学時に理想の教師像を心の中に保持していたかどうかを尋ねた。理想の教師像を持つことは、教職に就くための努力を促す可能性が

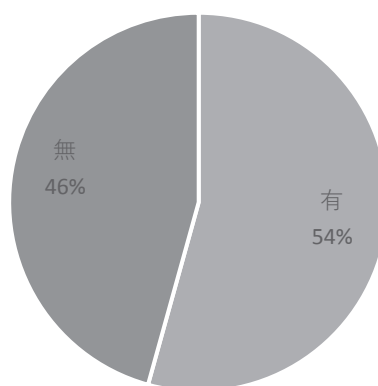


図3 在学時理想の教師像の有無

ある。一方で、理想の教師像は、至らない自己とそれとのギャップを学生に認識させることで、教職への熱意を冷却させる可能性もある。今のところ、これがどのように機能するのかわからない。なお、理想の教師像は、具体的な人物（回答者の中学・高校時代の先生など）でも、フィクション上の教師でも、また回答者が独自に考えたものでもよく、三つを区別していない。

調査結果を図3に示した。実数では、はいと答えた者が63人、いいえと答えた者が53人である。理想の教師像をめぐる、回答は10人の差でほぼ半々に分かれた。

3.1.4. 学習塾講師または家庭教師経験の有無

大学在学時に学習塾講師または家庭教師の経験があるのかを尋ねた。実際に児童・生徒を指導して対価を得た経験は、教員の業務のイメージを具体的なものにし、経験者の意欲を高めたと考えられる。一方で、適性についての再考を促し、教職をあきらめさせた可能性も捨てきれない。どちらの方向に働いたのだろうか。

調査結果を図4に示した。実数では、はいと答えた者が57人、いいえと答えた者が59人である。塾講師または家庭教師経験については、

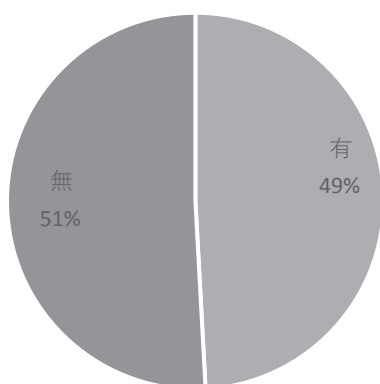


図4 学習塾講師・家庭教師経験の有無

回答は半々に分かれた。

3.1.5. 在学時に授業以外で熱心に取り組んだ活動

在学時に授業以外で熱心に取り組んだ活動について、アルバイト、サークル、ボランティア、その他の四択で答えてもらった。なお、回答は複数回答可である。また、これらの活動の詳細について尋ねてはいない。この項目を採りあげた理由は、これらは多くの時間やエネルギーを費やす活動であるという点にある。課外活動への取り組みは、単位取得のための勉強時間や集中力を削ってしまった可能性がある。一方で、

コミュニケーション能力などの対人スキルを高めたり、日常のストレス解消に役立ったりするメリットを有していたかもしれない。果たしてどちらの方向で影響するのだろうか。

調査結果を図5に示した。図の数値は実数である。アルバイトに熱心に取り組んだ者が最も多く（76人）、続いてサークル・部活動に取り組んだ者が次に多くなる（65人）。ボランティアやその他の活動については、それぞれ回答者の1/3に満たない。

3.1.6. 在学時の英語関連科目の成績

在学時の英語系の授業の成績について、「かなり良い、良い、まあまあ、悪い」の四段階で回答してもらった。本稿は学力以外の要因を探る研究であるが、次章でロジスティック回帰分析を試みる際、要因間の重要性を考えるうえで、英語能力について統制する必要があるために、これについて尋ねた。英語の成績優秀者は教師になる意欲が高い、といった関連があるかもしれないからだ。加えて、英語教師の教員採用試験には英語のペーパー試験がある。したがって、英語の成績の優秀者ほど有利になっていると予想される。ただし、回答は卒業数年後における自身の英語成績への回顧であり、在学時の客観的な成績ではない点に注意が必要である。

調査結果を図6に示した。図の数値は実数で

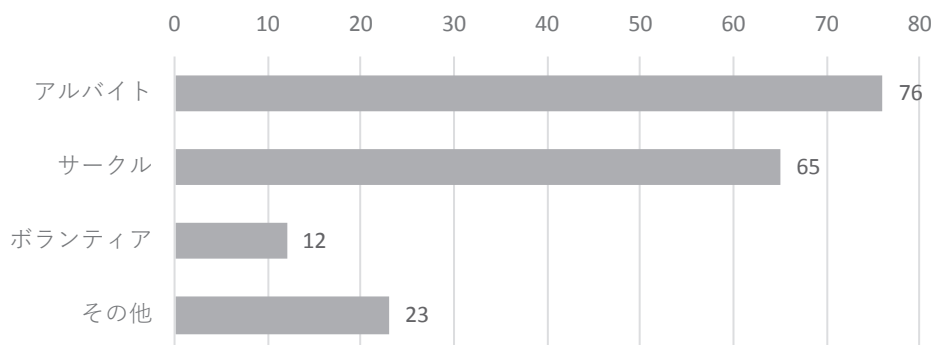


図5 熱心に取り組んだ課外活動

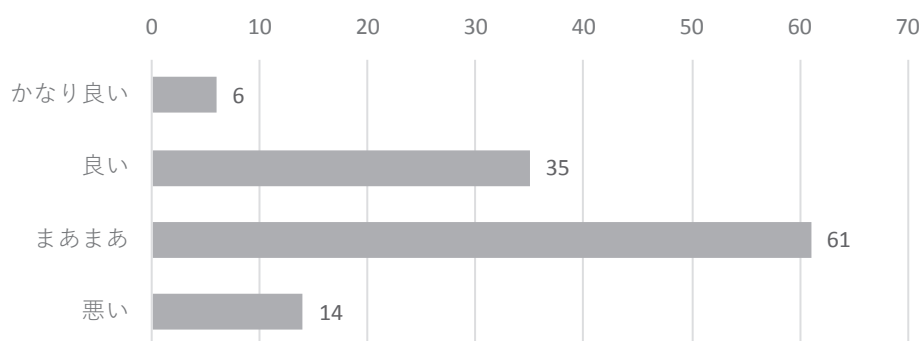


図6 在学時の英語科目成績

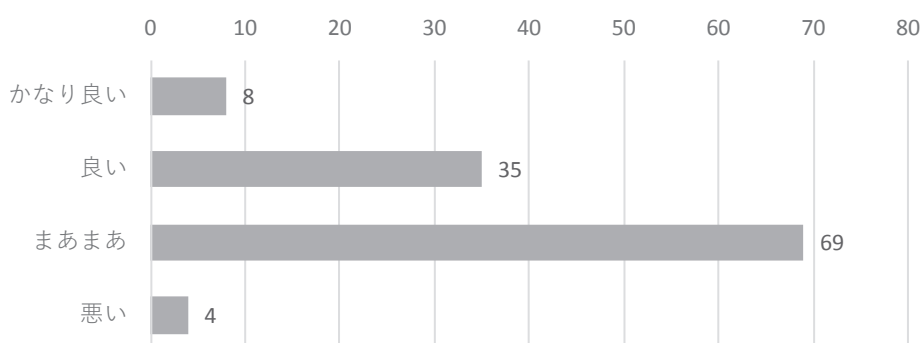


図7 在学時の全教科成績

ある。「かなり良い」「良い」を合わせて41人である一方で、「まあまあ」と答えた者が61人となっている。「悪い」と答えた者が14人であった。英語成績が並み程度からそれ以上に多く偏っていることがわかる。

3.1.7. 在学時のすべての科目の成績

在学時のすべての授業の成績について、「かなり良い、良い、まあまあ、悪い」の四段階で回答してもらった。教員採用試験には一般能力についてのペーパー試験がある。したがって、一般的な知能が高いほど有利になると想定できる。一般的な知能の高さは、すべての科目の成績の合計から推論できるだろう。また、教職を目指す努力を続ける上でも、自身の知能への認識は意欲を左右しただろう。ただし、英語成績

と同様、回答は卒業数年後における自身の成績への回顧であり、在学時の客観的な成績ではない点に注意が必要である。

調査結果を図7に示した。図の数値は実数である。「かなり良い」「良い」を合わせて43人である一方で、「まあまあ」と答えた者が69人となっている。「悪い」と答えた者が4人であった。すべての成績は、英語成績以上に並み程度からそれ以上に多く偏っていることがわかる。

3.1.8. 卒業後の教職経験の有無

卒業後、教職に就いたことがあるかどうかについて尋ねた。なお、質問では「非常勤講師を含む」とした。いずれにせよ教壇に辿り着いたかどうかが焦点である。

調査結果を図8に示した。実数では、はいと

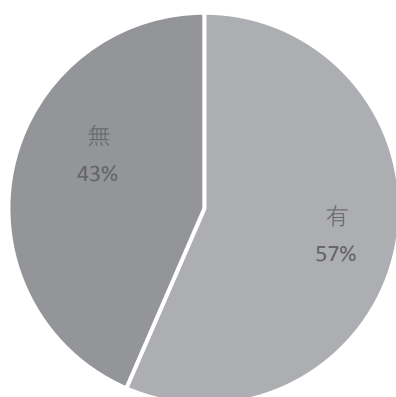


図8 卒業後の教職経験の有無

答えた者が65人、いいえと答えた者が50人、未回答者が1人である。なお、文教大学から毎年発行される大学案内によれば、英文科の教職就職者は3割ほどである。アンケートの回答者に占めるその割合は高いと言えるだろう。この点で、回答者には偏りがあった。なお、入学時の教職志望者のみが教職に就いたわけではない。入学時に特に教職を志望していなかった35人のうち、9人が教職を経験している。

3.1.9. 教職をあきらめたのはいつの時点か

入学時に教職を志望していた(3.1.1.)にもかかわらず、教職経験がない(3.1.8.)と回答

した者に対して、教職をどの時点であきらめたのかについて尋ねた。

調査結果を表1に示す。回答者は23人と少ない。加えて、想定していた回答者のみが答えたわけでもないことにも注意が必要である。「入学時に教職を志望しており、かつ教職経験がない」者は24人いた。このうち回答を寄せたのは18人である。このほか「入学時に教職を志望しており、かつ教職経験がある」者のうち4人が、さらに「入学時に教職を志望しておらず、かつ教職経験がない」1人が回答している。

表1からは、そのうちおよそ74%が在学時に教職をあきらめているのがわかる。特に在学3年次が多く、このときが岐路であることがわかる。一方で、卒業後も教職への希望を持ちながら、数年を経てあきらめる回答者が、この項目の回答者のうちおよそ1/4ほどいることがわかった。

3.2. 教職就職に影響する要因

続いて、教職就職に影響する学生時代の経験がどのようなものかについて検討した。分析には、「卒業後の教職の経験の有無」を有=1、無=0の応答変数とするロジスティック回帰分析を用いた。計算にはStataを使用した。説明変数として、前節で示した各質問項目を投入した。ただし、教職断念者のみに尋ねた3.1.9.項の「教職をあきらめた時点」は加えていない。また、3.1.2項にある在学時教職志望友人の有無についても、「無」と回答した者が3人しかおらず、データ不足のため分析から省いた。3.1.5項の「熱心に取り組んだ課外活動」のそれぞれ四つの選択肢については、該当するならば1の値を該当しなければ0の値を与えるダミー変数とし、複数回答可であることを反映させている。偏回帰係数(β)とオッズ比などの結果を表2に示した。なお、不均一分散の可能性に対応するため、信頼区間の推定は頑健標準誤差を用いている。

表1 教職をあきらめた時点表1 教職をあきらめた時点

時点	人数
在学時1年生	3
在学時2年生	4
在学時3年生	6
在学時4年生	4
卒業後1年目	1
卒業後2年目	1
卒業後3年目	2
卒業後4年目以上	2

まず、回答者全員についての分析結果を検討する。表2の左側の列である。もっともオッズ比の高い説明変数は、「在学時理想の教師像の有無」である。その値からは、大学在学時に教師についてのなんらかの理想像を保持しているならば、そうでない学生よりもおよそ3.8倍教職に就きやすいことがわかる。また、検定において1%水準で有意となる。続いてオッズ比の高い説明変数は、「学習塾講師・家庭教師経験」である。学習塾講師や家庭教師としての指導経験があればそのよう経験を持たない学生よりおよそ2.6倍教職に就きやすいことがわかる。かつ、この変数は10%水準で有意である。説明変数「大学入学時に教職志望か否か」のオッズ比もおおよそ2.5と高く、入学時に教職志望であった学生のほうが有利であることがわかる。ただし検定では有意とはならなかった。これらのほか「熱心に取り組んだ課外活動」の四項目「在学時の英語科目成績」「在学時の全教科成績」については、オッズ比がそれぞれおよそ0.7以上2.0以下で、すでに言及した他の説明変数ほど教職就職への大きな影響を観察できず、また

統計的に有意でもなかった。

続いて大学入学時から教職志望であった回答者にサンプルを限定して検討する。入学時教職志望者の結果を示す表2の中列からは、次のことがわかる。オッズ比のもっとも高い説明変数は、「在学時理想の教師像の有無」で、そこで「有」と答えた者のオッズ比は「無」と答えた者のおおよそ5.5倍となる。かつ5%水準で有意となる。教職志望者であるならば、在学時に理想の教師像を保有していることは、教職就職と関わりをもつ重要な変数であることが確認できる。一方で、10%水準で有意となる「熱心に取り組んだ課外活動（アルバイト）」は、オッズ比がおおよそ0.29となっており、教職に就く可能性をそうでない学生よりおよそ7割低めることがわかる。なお、このほか「学習塾講師・家庭教師経験」のオッズ比もおおよそ2.6と2倍を超えるが、有意とはならない。また、「熱心に取り組んだ課外活動（ボランティア）」のオッズ比もおおよそ2.2となるけれども、有意とはならない。さらに、有意ではないけれども、「在学時の英語科目成績」のオッズ比はおおよそ0.7で1を下回

表2 教職就職に影響する学生時代の経験（ロジスティック回帰分析）

	全員		入学時教職志望者		入学時「非」教職志望者	
	β	オッズ比	β	オッズ比	β	オッズ比
大学入学時に教職志望か否か（志望 = 1）	0.918	2.505				
在学時理想の教師像の有無（有 = 1）	1.324	3.760 ***	1.705	5.503 **	1.921	6.826
学習塾講師・家庭教師経験（有 = 1）	0.965	2.624 *	0.946	2.575	1.753	5.771 *
熱心に取り組んだ課外活動（アルバイト）	-0.349	0.705	-1.246	0.288 *	2.117	8.305 *
熱心に取り組んだ課外活動（サークル）	0.410	1.507	0.489	1.631	1.068	2.910
熱心に取り組んだ課外活動（ボランティア）	0.350	1.420	0.773	2.166		
熱心に取り組んだ課外活動（その他）	0.050	1.051	0.212	1.236	-1.966	0.140
在学時の英語科目成績（四段階）	-0.171	0.843	-0.340	0.712	0.108	1.114
在学時の全教科成績（四段階）	0.028	1.029	0.070	1.072	0.306	1.358
切片	-1.393	0.248 *	-0.023	0.977	-4.089	0.017 **
疑似決定係数		0.215		0.174		0.188
N		115		80		35

* < 0.1, ** < 0.05, *** < 0.01 : 頑健標準誤差を用いて信頼区間を推定した

ることが確認できる。すなわち、どちらかと言えば英語の成績があまり優れて「いない」層が教職を経験していることがわかる。

最後に大学入学時に教職を「志望しなかった」回答者にサンプルを限定して検討する。入学時「非」教職志望者の結果を示す表2の右列からは、次のことがわかる。なお、「熱心に取り組んだ課外活動（ボランティア）」は「有」と回答した者が2名と少ないため、説明変数から省いた。さらに、1%水準および5%水準で有意となった説明変数は無かった。35件とデータ数が少ないためだろう。オッズ比では、「熱心に取り組んだ課外活動（アルバイト）」がおよそ8.3、「学習塾講師・家庭教師経験」がおよそ5.7、「在学時理想の教師像の有無」がおよそ6.8と高い。前二者については10%水準で有意となった。なお、「学習塾講師・家庭教師経験」と「アルバイト」の二つの経験は重複していない。なぜなら、入学時に教職志望でないにもかかわらず教職を経験した9人のうち、「学習塾講師・家庭教師経験」にあると答えたのは3人、「熱心に取り組んだ課外活動（アルバイト）」にあると答えたのは7人となるが、相互に重なっているのは2人しかいないからである（そもそも分析において統制されている）。すなわち、アルバイトとして家庭教師や塾講師の経験をしたものは少数派である。加えて、有意ではないけれども、このほか「熱心に取り組んだ課外活動（サークル）」のオッズ比もおおよそ2.9と相対的に高いと言える。

4. 考察

前章の表2のロジスティック回帰分析の結果は、まずは大学入学時にすでに教職志望であることが教職就職において有利であることを示している。このことは自明だろう。この章では、それ以外の発見について、教職就職と関連する理由について議論してみたい。

第一に、教員就職において在学時に理想の教

師像を保持していることが関係している。特に、入学時教職志望者においては、他の説明変数と比べてオッズ比が最も高い。教職「非」志望の学生においては有意ではないけれども、やはりオッズ比は比較的高い。理想の教師像を持つことの重要性は、山根ほか（2010）、姫野（2010）、姫野ほか（2011）、姫野（2012）、松本（2013）などの先行研究において繰り返し指摘されている。しかしながら、教職となることに関連があるかどうかは不明であった。本研究ではその強い関係を確認することができたと言える。

理想の教師像を持つことがなぜ教職就職に有利な条件となるのだろうか。考えられるのは、それが努力目標として機能するという可能性である。質問では「理想の教師像」が、具体的な人物か、フィクション上の人物か、または回答者が独自に考えた教師に必要な要素の集合なのかを弁別していない。文教大学の英文科生を直接指導した我々の経験からは、小中高校生時代に指導を受けた具体的な人物が彼らの理想となっているように見受けられる。実在の教員は、ステレオタイプの熱血教師を主人公とした学園ドラマで見られるような、思いやりの深い人物だったり、優れた問題解決能力を発揮するわけではないであろう。しかし、身近でかつ親しみやすい存在であるため、努力によってそうした理想に近づけると学生らに思わせる効果があるのではないかと推測される。この推論の正しさを判断するには、どのような像であれ理想の教師像を持つことが重要なのか、それとも特定のタイプの理想像が特に教職に就くことに関連するのか、それはどのようなタイプなのか、そしてそれがどのような経路を通じて教職へと至るのか、明らかにしておく必要がある。

第二に、学生時代の塾講師や家庭教師として働くことは、教職就職に有利な経験となる。ただし、その効果は入学時教職志望者よりも教職「非」志望の学生のほうが大きい。その理由は次のように考えられる。「実際に子どもを教える」という経験は、教職への適性や面白さをそ

の学生に自覚させ、教職へと動機づけるだろう。教職「非」志望の学生の間では、結果として、もともと教職への意欲がない学生との間に大きな差を生み出すことになるだろう。一方、入学時教職志望者の間では、講師や家庭教師の経験は教職「非」志望の学生の間ほど差を生まないものの、やはり適性への認識や自信の点で、経験のある学生にアドバンテージをもたらすと推測される。しかし、教職「非」志望の学生よりもオッズ比が小さく有意とならないのは、講師や家庭教師の経験のあるなしにかかわらず入学時教職志望者において教職への意欲に大きな差がないからであろう。

第三に、「熱心に取り組んだ課外活動」については、項目によって影響が異なる。サークル、ボランティアについては有意とはならないものの、教職就職にほとんど影響がないか、またはプラスの影響があると推測できる。アルバイトについては、入学時教職志望者と教職「非」志望の学生とでは影響の出方が異なる。それは前者にとってはマイナスに、後者にとってはプラスに働く。したがって、アルバイトについては、3.1.5. 項で言及したような一方向の方向への影響があるわけではなく、回答者の属性に左右されるものであると考えられる。入学時教職志望者においては、アルバイトの経験は教職以外の職業の魅力を知る経験となり、教職への意欲をクールダウンさせるのかもしれない。一方で、教職「非」志望の学生においては、仕事一般への意欲を高め、結果として教職採用試験を勝ち抜く能力を向上させているのかもしれない。なお、今回のアンケートではアルバイトの詳細については立ち入って尋ねていない。アルバイト内容によっても教職就職への効果が変わる可能性があり、さらなる検討が必要だろう。

第四に、在学時の成績は影響しない。これは英語成績に限っても、成績全般に限っても同様である。有意ではないものの、入学時教職志望者に限れば英語の成績が特別優れていなくても、教職に就いていることを3.2. 節で言及した。

こうした調査結果となった理由として、英文科の学生はそもそも他学部他学科の学生に比べれば英語のスキルは高く、この点で大きな差がないからであるというのが考えられる。周囲に一定の英語能力のある同級生が存在しているので、あるいは、回答者は他の学生の成績を知っているわけではないので、自分の相対的な位置が分からずに控えめな回答をしてしまうことになる。いずれにせよ、在学時の成績の影響はほとんどないと言える。これは現在の一般企業への就職の場合と同様であり、驚くようなことではない。

第五に、これはロジスティック回帰分析ではなく表1の調査結果からわかる事実であるが、教職をあきらめる時点は、およそ3/4が学生時代で、およそ1/4が卒業後となっている。卒業後の教職断念者6人のうち、教職経験のあるものが4人いる。4人はおそらく臨時採用等の非常勤講師だったと考えられる。卒業後に採用試験の勉強をするのは、非常勤として授業準備することに時間を取られるために難しいことが多い。そうすると、新卒採用が主流となっている現在の日本においては、卒業後非正規雇用の教員であることにはキャリア形成のうえでリスクがある。加えて、在学時に教職をあきらめた17人のうち4人は四年次である。四年次は、民間企業への就職活動と教員免許取得のための教育実習が重なることが多く、やはりその後のキャリア形成におけるリスクが残る。このような決断の遅れをもたらす学生・卒業生自身の教職への適性への認識について、指導する側として把握しておくべきことであり、さらなる検討課題となった。

5. 結論

文教大学文学部の英文科の卒業生に対するアンケート調査によって、次のことがわかった。英語教師への就職に影響のある大学時代の経験として、第一に理想の教師像を持つこと、第二

に塾講師や家庭教師の経験の二つが挙げられる。その理由として、理想の教師像を持つことは教員となるための努力を教員志望者に促し、塾講師や家庭教師の経験は教えるための具体的な技術を身に付けさせ、教師となることへのリアリティを高めるからだろう、と予想した。このほか、アルバイトに熱心に取り組む経験は、学生が入学時に教職志望かどうかによって教職就職にプラスにもマイナスにも作用する。ただし、その理由についてはさらなる検討が必要である。また、サークル活動やボランティアに熱心に取り組むことは、大きな影響を持たないことがわかった。さらに、学生時代の英語科目の成績や全教科の成績は、教職就職との影響を持たなかった。加えて、教職を断念する時期は多くが学生時代であるが、卒業後も非常勤などを続けて最終的に断念するケースがあることもわかった。

なお、この調査では、理想の教師像の具体的なイメージや、アルバイトやサークル活動の詳細については立ち入って尋ねていない。理想の教師像のタイプや、アルバイトやサークルの内容によっては、教職就職に影響するものとそうでないものがあるかもしれない、今後の検証が必要だろう。さらに、本研究での分析結果が、文教大学文学部の英文科生以外にもどの程度当てはまるのか、また英語教師以外の教師にも適用可能であるのか、さらなるデータを収集して検討が行われることが望ましい。

参考文献

- 高橋一幸 (2011) 『成長する英語教師』 大修館書店, 255p.
- 奈良勝行 (2006) 『生き方としての英語教師』 三友社出版, 222p.
- 姫野完治 (2010) 「段階的教育実習による教職志望学生の成長観の変容」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』 32, p.153-165.
- 姫野完治, 石橋研一, 神居隆, 斎藤孝 (2011) 「教職実践演習のカリキュラム開発と試行」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』 33, p.123-132.
- 姫野完治 (2012) 「教職志望学生の成長観の変容を支援するポートフォリオおよびカルテ・システムの開発と試行」『教師学研究』 11, p.1-11.
- 松本浩司 (2013) 「教員養成大学におけるキャリア教育が大学での学習の動機づけに与える効果に関する実践的研究: 「教職の意義等に関する科目」におけるキャリアデザインの取り組み」『名古屋学院大学論集 社会科学篇』 49 (3), p.59-70.
- 柳瀬陽介, 組田幸一郎, 奥住桂編 (2011) 『成長する英語教師をめざして』 ひつじ書房, 247p.
- 山根文男, 古市裕一, 木田功彦 (2010) 「理想の教師像についての調査研究 (1): 大学生の考える理想の教師像」『岡山大学教育実践総合センター紀要』 10 (1), p.63-70.

付録：アンケート文面

拝 啓

寒中お見舞い申し上げます。アンケート調査へのご協力をお願いです。このはがきは、文教大学文学部・英米語英米文学科の2011年度から2014年度の卒業生(約600人)を対象に送付しております。

私ども秋山・渡辺・大場の研究グループは、文教大学文学部英文科の専任教員で構成されています。(ただし、大場は2018年度から日本大学に移籍しました)。

現在、私どもは、教員になることと教職カリキュラム以外の大学時代の経験がどのように関係しているのか調査しております。現在教員である方のデータのみならず、「かつて教員を目指していたが途中で進路を変更した」という方、または「そもそも入学時から教員を目指していなかった」という方のデータも欲しております。つきましては、回答のほどをお願いいたします。

また、返信ハガキではなくウェブフォームからも回答いただけます。特記事項がある場合、ウェブフォームをお使いください。

URL : <https://goo.gl/forms/4SVV19mz2vDraPqw1>

なお、回答は個人が特定できない形式で集計し、学会発表や論文として公表させていただく予定です。

ご多用中のところ、まことに恐縮ではございますが、2019年3月12日までにご返送くださいますようお願い申し上げます。

敬 具

2019年2月12日

秋山朝康(文教大学)

渡辺敦子(文教大学)

大場博幸(現・日本大学 / 元・文教大学)

問い合わせ先: 秋山朝康

akitomo@koshigaya.bunkyo.ac.jp

文教大学文学部英文科 2011 年～2014 年度卒業生対象 教職志望に関するアンケート

以下の問について括弧内の該当する選択肢を丸で囲んでください。

1. 文教大学に入学した時点で、教員を目指していましたか。
(はい / いいえ)
2. 文教大学在学時に教員を目指す友人が常いましたか。
(はい / いいえ)
3. 在学時に「理想の教師像」を心の中に保持していましたか。
(はい / いいえ)
4. 在学時に学習塾講師または家庭教師の経験はありますか。
(はい / いいえ)
5. 在学時、勉学以外の活動で熱心に取り組んだことは何ですか。
(複数回答可)
(アルバイト / サークル / ボランティア / その他)
6. 在学時の英語科目の成績について教えてください。
(かなり良い / 良い / まあまあ / 悪い)
7. 在学時の成績全般について教えてください。
(かなり良い / 良い / まあまあ / 悪い)
8. 大学卒業後、教職に就いた経験がありますか(非常勤講師を含む)。
(はい / いいえ)
9. 問1で「はい」と答え、かつ現在教職に就いていない方のみにお尋ねします。教職を断念したのはいつ頃ですか。在学時X年生または卒業後X年目という形でお答えください。

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。